

聖書:士師記6章33節～7章8節

説教:恐れる者を励ます主

はじめに

イスラエルが神の約束の地であるカナンに入ったとき、そこにあったバアルの神々に誘惑されて拝むようになり、主の目に悪であることを行います。その結果、ヨルダン川の東側にすんでいたミディアン人に毎年収穫の時期になると襲われるようになり、とうとう七年目にイスラエルは主に叫び求めます。この叫びを聞かれた主はイスラエルを救うためにギデオンを召し出し、「わたしはあなたとともにいる」と語って励まします。

こうして召し出されたギデオンに主は、まずバアルの祭壇を壊して、主の祭壇をそこに据えなさいと命令します。そのバアルの祭壇を作ったのは自分の父親でした。悩んだ末に誰にも見つけられないように夜に実行する。翌朝、これを発見した町の人たちは父親であるヨアシュのところへ押しかけ、息子のギデオンを殺せと要求する。ヨアシュはバアル礼拝を推し進めた中心人物ですから、本来ならバアルの側に立たなければならない立場にあるはずですが、ところが、彼はこう言う。「もしバアルが神であるなら、自分の祭壇が壊されたのだから、自分で争えばよい。」この問題に関しては誰も手を出してはいけません。バアルが本当の神であるならば、バアル自身が決着をつけてギデオンは死ぬことになるだろう。そう語る。結果はどうなったか。ギデオンは無事でした。それで何が分かったか。不思議なことに父親の言葉によってバアルは神ではなかったことが証明されます。

このような試練を通してからギデオンは、ミディアン人をはじめとする敵の部隊に向かって行きます。そこで何が起きたのか。そのこと見ていきます。

1 恐れるギデオン

1) アビエゼル人

ギデオンは角笛を吹き鳴らし、全土に招集をかけます。34節には、そのとき真っ先に駆けつけてきたのがアビエゼル人であったと書かれています。アビエゼル人はギデオンと同じマナセ族でギデオンの親族と思われま

す。なぜ彼らが真っ先に駆けつけるのでしょうか。親戚同士の結束が固かったのでしょうか。でもギデオンは当初、自分は年は若いし、家柄も大したことがない。こんな自分の言うことに耳を貸す者は

いないと思っていたのです。それなのに三万二千人にも兵士がギデオンに従うのはなぜか。そのことについてはまた最後の方で触れます。

2) 神を試す

さて集まってきた兵士たちを見て、ギデオンは勇気百倍の力を得たのか。反対でした。だんだん自信をなくしてしま

う。というのは、7章12節を見ると敵はイナゴのように大勢で、らくだは海辺の砂のように数え切れなかったとあります。対するギデオン軍は三万二千人。まったく数が足りないのです。たとえ人数が足りたとしても、どのようにして人を動かし作戦を実行するのか、そんなことを何も知らない。戦い方を知らない。そういうことを考えたら恐ろしくて逃げ出さなくなったのではないかと思います。

しかしもう後には引けません。それで彼は6章36節でこんなことを言うのです。「もしあなたが言われたとお

3) 三百人が残る

り、私の手によってイスラエルを救おうとされるのなら、ご覧ください。私は刈り取った一匹分の羊の毛を打ち場に置

きます。もしその羊の毛だけに露が降りていて、土全体が乾いていたら、あなたが言われたとお

り、私の手によって、あなたがイスラエルをお救いになると私に分かります。」これは神を試すことですから神の怒りを買うことになる

んだ者たち。その数たったの三百人でした。残った人たちは何を考えたでしょうか。

2 恐れる兵士たち

1) ハロデの泉 (震える泉)

聖書には手がかりとなることが二つ書かれています。一つ目。ギデオン軍がキャンプをしたのは7章1節によれば「ハロデの泉」と書かれています。この「ハロデ」、この名前の元となることばは「震える」という意味があるのです。なぜそんな名前がついたのか。兵士たちがこわくなって震えたからではないのか。そのような推測ができる。でもこれだけでは断定できない。

2) 引きとどめた

そこで二つ目のヒント。7章8節前半。「そこで三百人の者は、兵の食糧と角笛を手を取った。こうして、ギデオンはイスラエル人をみな、それぞれ自分の天幕に送り返し、三百人の者だけを引きとどめた。」

「引きとどめた。」ももとは、戦いを前にして兵士を「力づける」とか「自信を持たせる」、「堅く握る」というほどの意味です。さきほどの「震える」をあわせてこの二つのヒントから何が言えるか。残った三百人の兵士たち。これで敵とどうやって戦うのか。勝てるわけがない。敵に殺されるだけ。そう思ってみな震え上がってしまった。それでギデオンがなんとか説得して、三百人を引きとどめた。どうもそのようなことのようにです。三百人しか残されなかったとき、これはもう不可能ではないか。そう考えてギデオンは逃げ出したいと思っても不思議ではない。ところが、彼は逃げ出さず、反対に怖じ気づく兵士たちを勇気づける側に立ちます。なぜそれができたのかでしょう。

3 主があなたとともにおられる

1) なぜギデオンは主に従うのか

神がギデオンを召し出そうとして最初に声をかけたとき、主の使いはこう言いました。6章12節。「力ある勇士よ、主があなたとともにおられる。」これは何かの冗談でしょうか。ギデオンはそのとき敵に見つからないように、びくびくしながら隠れて農作業をしていたのです。どこが勇士なのか。勇士のかけらもありません。でも彼はそのあと、奇蹟と呼ばれるようなことを通して神から教えられていくのです。

彼はここまで四つの奇蹟を経験しています。まず最初はこうでした。主がほんとうに自分に語りかけているのか。それがわかるようにしるしを見せて欲しいと願ったら、岩から火が燃え上がり肉と種なしパンを焼き尽くしました。二つ目は、バアルの祭壇を壊せと言われたときのことです。父親と町の人々に殺されるかもしれないと思っていたら、殺されないどころ、父親が主を証しするようなことばを語りました。三つ目。主の霊におおわれてギデオンが角笛を吹いたときは、彼に従うために人々が集まってきた。これも奇蹟でしょう。それで自信をもってもよさそうなものですが、それでも自信がない。それで四つ目の奇蹟。羊の毛が露で濡れるようにとか濡れないようにと、面倒な願いをしたら、主がそのようにしてくださった。自分に何か才能があったわけではない。ギデオンは、どうしてこういうことが自分に起きるのか不思議だったでしょう。でもわかってきたことがある。確かに主は自分とともにおられ、自分を通して主はイスラエルを救おうとされている。そのことがわかるから、残った三百人が怖じ気づいてぶるぶる震えていたとき、力づけることができました。

2) なぜ兵士たちはギデオンに従うのか

では、兵士たちはどうでしょうか。残った三百人はこれでは戦うどころかすぐに殺されると不安に思っただけで震え始めた。でもギデオンが説得したとき、自分のいのちをかけてもよいと思った。それはなぜでしょう。

主がギデオンとともにおられることが見えていたのではないのでしょうか。はじめは、びくびくして自分に自信のもてなかったギデオンだったのをみな知っていた。ところがオフラに主の祭壇を築いたときからギデオンがどんどん変えられていくのを見てきたのです。さすがに三百人しか残っていないのを見たときは、どうなるのかと思ったけれど、ハロデの泉で改めてギデオンが語ることばを聞いたとき、確かに主がともにおられるとわかった。だから従おうとしたのではないのでしょうか。

3) イスラエルの罪を背負われる主

その主とはどのような方なのでしょう。ここを読むと、戦いに勝つのか負けるのか、そのような勇ましい話しにばかり目が行きます。でもここにも見落としてはならない聖書の真実があります。なんでしょうかそれは。主は、罪を犯したイスラエルを救おうとされています。それでギデオンを用い

る。では、彼らが犯した罪はどうなったのでしょうか。主に叫び求めたので、「もうよい」と水に流したのか。とんでもありません。人の罪は必ず償いを要求します。神がイスラエルを救おうとギデオンを動かしているのであれば、神はイスラエルの犯した罪を赦したことになります。でもいったいどうやって赦したのでしょうか。一つしかない。主ご自身が罪を負われ、さばきをうけられる。そのような形です。

ということは、イスラエルが罪を犯し、敵に襲われ苦しんでいたとき、神は黙っていたのではない。神も苦しんでいたことになる。それで、イスラエルをなんとか救わなければと心を痛めます。主が罪を背負い十字架に向かわれます。そのような主がギデオンのそばにおられます。

だれがイスラエルを救うのでしょうか。だれが私たちに救うのでしょうか。十字架でいのちをお捨てになる主が救ってくださる。そのことを知るようにと主はきょう語ってくださいます。